

『万葉集』卷二・一六一番歌「向南山」についての考察

森 ほか

一 はじめに

『万葉集』卷二・一六一番歌は、以下の歌である（注¹）。

（二書に曰く、天皇崩ります時に、太上天皇の製らす歌

二首）

向南山 陳雲之 青雲之 星離去 月矣離而

当該歌は、崩御された天武天皇を悼む持統天皇御製の挽歌群の中の一首であり、近年の注釈書は、「北山にたなびく雲の青雲の星離れ行き月を離れて」という訓みを採用している（注²）。

初句「向南山」は、「南を向く山」として、「北山に」と解釈されるが多く、つまり、北山にたなびく青雲が、星から離れ、月からも離れていくという内容が詠まれているとしている。しかし、「向南山」の訓みである「北山に」は、まだ定訓とは言

えず、現在も様々な訓みが提示されている。したがって、当該歌は難訓歌として位置づけられ、また、内容的にも、難解な歌として捉えられている。

本稿では、当該歌の初句「向南山」について、その表記に着目し、訓みや和歌の解釈を考察する。また、類例する漢籍との関連や、当該歌最古の写本である金沢本の表記を検討しながら、「向南山」をどう捉えるべきか、どの山を指しているのかを考察する。さらに、当該歌で詠まれている「向南山」と漢籍における「南山」との共通点や、「南山」にみられる神仙思想を挙げ、「向南山」の「訓み」を試みる。

二 「向南山」の訓み

「向南山」の訓みは現在、「カムナミヤマ」と「キタヤマ」の二説にはば分かれている。この訓みの二説について、平館英子

は次のように述べている。

カムナミヤマ系統の訓は文字表記と訓との間に直接的な關係を考慮することは難しく、おそらくは、向南という方向性を具体的な地勢に当てはめた理解と考えられる。キタヤマは「南に向く」という文字表記に合致する北という方角上の意味をくみ取った理解であり、『萬葉童蒙抄』はその北という方角の意味に「天子は南面してた、せ給ひ……」と中国思想の反映を指摘する。^(注3)

つまり、二つ目の「カムナミヤマ」は、カムナミヤマを「南に向かう山」(南に位置する山)と捉えると同時に、「飛鳥の神なび山」^(注4)とみる訓みである。南に位置する山として捉える訓みは、他にも、「カツラキ」^(注5)、「カムヤマ」^(注6)、「ヨシノヤマ」^(注7)が提示されている。「カツラキ」は葛城山を指し、「カムヤマ」は「飛鳥の神なび山」三諸山「神岳」神山」^(注8)とする訓みである。「ヨシノヤマ」については、次節以降後述する。

二つ目の「キタヤマ」は、「南を向く山」、すなわち、「北にある山」であるとした戲訓的訓みである。小島憲之は、北に墓所としての陰を示しているとし、「文字によって北と反対の南を表し、陰なる北を明確に示す」^(注9)と述べている。つまり、

陽である南を引き合いに出すことにより、北の陰性を強調していると理解するのである。

以上、「向南山」の訓みの解釈をまとめると、「南に向かう山」「南にある山」とする見方と、「南を向く山」「北にある山」とする見方の二説が挙げられる。これらに共通するのは、「向南山」を「向南山」とし、「向」の動作主を山と捉え(「向南」+「山」)、いずれも「向南山」を、「陳雲」の空間的位置を表す山の名前として訓んでいることである。訓み方は大きく二説に分かれるといっても、前述したように、現在は「キタヤマ」の訓みが一般的である。しかし、当該歌には中国思想が影響していると指摘されており^(注10)、これは、当該歌を解釈する上で、非常に重要な指摘である。したがって、漢詩に拠った文字解釈で、当該歌の「向南山」も見ていく必要があるといえよう。

「向南山」が詠まれる漢詩の類例としては、『全唐詩』の李冶「偶居」に、「狂風何事相搖盪、吹向南山復北山」^(注11)がある。ここでの「向」は、「向南山」(「向」+「南山」) また、「向北山」(「向」+「北山」)と読み取るべきであり、風の吹く方向を示しているため、「風は南山にも北山にも吹く」と解釈できる。「狂風何事相搖盪」は「大風はどのようなものも動かす」の意であり、「南山」と「北山」、すなわちすべての空間に風が

吹くという、全体的空間を感じさせる表現である。

しかし、「向南山」を「向_レ南山」「向_レ南」＋「山」、すなわち「北山」と解釈すると、「風は北山にも北山にも吹く」という、意味の通らない訳になってしまう。北山については、「北山」と明確に表記されており、したがって、この詩において「向南山」は、「向_二南山_一」（「向」＋「南山」）と読み取るべきであり、「北山」を表す語ではないといえる。

さらに、次に示すのは、王翰の「蛾眉怨」の一節である。

不意君心半路迴、求仙別作望仙臺。
倉琅禁闥遙相憶、紫翠巖房畫不開。

欲向人間種桃實、先從海底覓蓬萊。
蓬萊可求不可上、孤舟縹緲知何往。

黃金作盤銅作莖、晴天白露掌中擎。
王母嫣然感君意、雲車雨旆欲相迎。

飛廉觀前空怨慕、少君何事須相誤。
一朝埋沒茂陵田、賤妾蛾眉不重顧。

宮車晚出向_二南山_一、仙衛逶迤去不還。
朝晡泣對麒麟樹、樹下蒼苔日漸斑。

人生百年夜將半、對酒長歌莫長歎。
賸知白日不可思、一死一生何足算。（注12）

当該詩では、皇帝が亡くなって南山（終南山）へと向かう様子が詠まれている。「求仙」「仙衛」など、神仙思想の影響も見られる詩句も確認できることから、当該詩における「向南山」の「南山」は、神仙と関係の深い「終南山」を指しているといえる。つまり、この場合においても「向南山」は、「向_二南山_一」（「向」＋「南山」）と読み取るべきであり、「向_レ南山」、すなわち「北山」とは解釈し難いのである。なお、「死者（死者の魂）」が、南山へと向かう様子」が描かれている点は着目すべきである。この点については後節で考察するが、一六一番歌とも関連する、重要な描写であると考ええる。

また、宋の時代の詩ではあるが、呂頤浩の「次石迪功韻」に、「莫辞敘迹归南亩、幸免移文向_二北山_一」（注13）があり、「向北山」の表現が確認できる。ここも、「向_二北山_一」（「向」＋「北山」）と読み取るべきであり、この「北山」は、都の北に位置する山、「鐘山」を指すと解釈されている（注14）。したがって、「向北山」が「北を向く山」（「向_レ北」＋「山」）、つまり「南山」を表すという解釈は成り立たない。このように、後世の宋の時代の用例においても、「北山」が「向_レ南山」と表現された可能性は低いと考察するのである。

「キタヤマ」の訓みを支持する小島憲之は、当該歌が漢籍の

影響を受けていると指摘しているが^(注15)、それならば、古代中国に存在しない概念を和歌に詠み込む妥当性は検討する必要があるだろう。特に「向南山」は、漢詩上では、「向南山」「向」＋「南山」と捉えるのを、日本では正反對である「北山」「向_レ南」＋「山」と捉えるのは、解釈としては考え難いのである。したがって、「向南山」は「キタヤマ」と訓むべきではなく、「向」は「南山に向かって」という方向介詞として作用していると思えるべきではないだろうか。

さらに、「向南山」を「キタヤマ」と訓むべきではないと考える理由の一つに、金沢本の存在もある。金沢本とは、平安時代後期、十二世紀前半書写の伝本であり、藤原定信筆とされる、粘葉装の冊子本である。卷二の大部分と、卷三・四・六の断簡が残存しており、当該歌における最古の写本である。金沢本は、非仙覚本系統の平仮名別提調の形式であるが、当該歌一六一番歌には訓が付されていない。金沢本以前とされる写本はいずれも当該歌が収録されておらず、現時点ではこの金沢本が、当該歌においては最古の写本であるといえる^(注16)。

この金沢本には、「向」の上に「雲」の字があり、「雲向南山」と記されている。この「雲向南山」の表記は、金沢本のみ是唯一確認できるものである^(注17)。「向南山」の上に「雲」の字が

あるとすれば、当該歌には、「雲向南山」「陳雲」「青雲」の三度、「雲」が表記されることになる。このように、同じ語を繰り返す技法は、六朝唐詩にもみられる^(注18)。小島憲之は、この技法が『懷風藻』にも二・三例みえることを挙げたうえで、「詩は勿論、歌の面に於てもすでに近江朝前後を中心として中國文學の投影がみられる」と述べている^(注19)。歌の技法的側面からみても、「雲向南山」とする金沢本の本文は理にかなっているところもあり、考察を進めるにあたっては重視されるべきである。

「雲向南山」は、これを訳すと「雲は南山に向かって」とするのが自然である。類似した漢詩としては、『具茨集』巻五の「送郑翁还_レ其四」に、「城头云向_レ南飞远、城下车从_レ北发迟」^(注20)がある。「城头云向南飞远」は、「城の上には雲が遙か南へと飛んでいき」と解釈できる。当該歌の本文を「雲向南山」とあるとすると、雲という動作主が南(南山)という対象に向かっていくといった、両詩歌における文法上の相似が指摘できるのである。先述した、王翰の「蛾眉怨」にも「宮車晚出向南山」とあり、「宮車」が「南山」という対象に向かう様子が描かれている。天武天皇挽歌に中国思想の影響がみられるという指摘をもとに考えるならば、やはり漢籍の文法に倣って解釈するべきだと考える。金沢本の「雲向南山」の「雲」に関して、誤

写の可能性が十分に考えられるが、このような本文が生まれる背景には、以上のような理解があったものとも考えられる。

以上の考察により、「向南山」を「キタヤマ」と訓むことは妥当ではないと判断するのである。

三 「南山」と吉野

前節で「向南山」を「キタヤマ」と訓むことは妥当ではないと結論付けた。つまり、「向南山」は「南山に向かつて」（「向」＋「南山」と解釈すべきと考えるが、では、「南山」とはどの山を指すのだろうか。現在、「向南山」が指す山については、香具山とする説、あるいは葛城山や高取山とする説など、様々な解釈が分かれている。ただ、「向南山」を「キタヤマ」と訓まないとする、北の方角にある山は該当しないであろう。つまり、飛鳥や藤原の地の南側にある山が、「南山」と捉えられていたのではないだろうか。

漢籍における「南山」とは、道教や神仙思想において重要な場所とされている。古くは、中国の陝西省にある終南山を指し、終南山は「道教発祥の地」と言われている。終南山が登場する漢賦には、班固の「終南山賦」がある。

伊彼終南、巋嶷嶙峋。紫青宮、觸紫辰、欽崑鬱律、萃於霞霧。曖曖曖藹、若鬼若神、傍吐飛瀨、上挺脩林。玄泉落落、密蔭沉沉、榮期綺季、此焉恬心。三春之季、孟夏之初、天氣肅清、周覽八隅。皇鸞鸞鸞、警乃前驅、爾其珍怪。碧玉挺其阿、密房溜其巔。翔鳳哀鳴集其上、清水泌流注其前。彭祖宅以蟬蛻、安期饗以延年。唯至德之為美、我皇應福以來臻。埽神壇以告誠、薦珍馨以祈仙。嗟茲介福、永鍾億年。

（注21）

当漢賦について、川合康三は、次のように述べている。

「終南山の賦」（『初学記』卷五）では「榮期・綺里、此ここに心を恬んず」と、榮啓記・綺里季といった隠棲者が安らぎを得る場所として、また「彭祖は宅して以て蟬蛻し、安期は饗して以て延年す」と、彭祖や安期生が長生を獲得した場所としてその地を言い、それにあやかって天子がそこで長壽を願ったことに續けている。^{（注22）}

終南山は、俗世から離れて安らぎや長寿を得られるという、超俗性を性質としてもつ場所なのである。唐代では、終南山は詩の題材として重要視され、多くの作品に詠みこまれるようになる。

また、古代中国の伝説上の山である蓬萊山や崑崙山を指す場

合もあり、いずれの山も神仙思想の影響が大きい聖山である。たとえば崑崙山について、『漢書』『西域伝』には「南北有大山、(中略)其南山、東出金城、與漢南山屬焉」とあり、崑崙山が南山と表記されている^{注23}。このように、漢籍における南山は、神仙的・超俗的なシンボルを備えた山として描かれているのである。

一方、飛鳥・藤原の地の南側にあり、このような漢籍における神仙的・超俗的なシンボルを備えた山としては、吉野山が重要な意味を担っている。『懷風藻』で吉野を詠じた漢詩群には、神仙思想の影響が見え、神女が男と契りを結ぶ神仙譚「栢枝伝」は、何人もの作者が詠んでいる題材でもある^{注24}。また、神仙思想の信仰を継承している修験道も、吉野が中心である^{注25}。さらに吉野は、不死の仙薬とされた水銀鉱床が豊富に存在する地帯であり、こうした背景も、吉野が神仙境と観念されることにつながっているのである^{注26}。

また、道教において、死者の魂は「南宮」に昇るとされる。南宮とは、南方に位置する、道教独自の「死者の魂が浄化する場所」であったと推測されている^{注27}。鳥谷知子は、南宮の性質について、「山にあり、生前の徳が特にすぐれた者だけが選別されて赴くところである」とまとめ、次のように述べている。

道教では死者の魂は南宮に向かうと考えられ、そこでの鍛錬を経て仙人になると信じられた。(中略)吉野はこのような南宮の性格を備えた都の南に位置する山とうけとめられていたと思われる。肉体の消滅、死別が人間の避けられない運命ならば、天帝の為に次に太后が願ったのは、神仙としての再生であろう。^{注28}

つまり「南山」には、死者の魂が向かう南宮があり、吉野はその性質を担う場所であったことが理解できる。吉野へと死者の魂が向かうことで、その魂は神仙としての生まれ変わりを信じられていたのである。

天武天皇と吉野の関連については、壬申の乱の吉野入りや、吉野での六皇子盟約など、周知の通りである。『万葉集』においては、吉野を詠った御製歌が複数存在しており、天武天皇にとって、吉野は思い入れのある場所であると理解できる。『古事記』の序文には、大海人皇子(天武天皇)の吉野入りについて、「南の山に蟬のごとく蛻けましき」と記されている^{注29}。「蟬蛻」とは、仙人となることを指す言葉であり、古代中国の神仙観が見て取れる^{注30}。ここで、吉野山を「南山」と称している点は留意すべきであろう。

さらに、次に示すのは『懷風藻』紀朝臣男人の「扈從吉野宮」

の詩である。

鳳蓋南岳に停まり、追いて智と仁とを尋ぬ。谷に嘯いて將に孫と語り、藤を攀じて許と共に親しむ。峯巖夏景變じ、

泉石秋光新たし。此の地は仙靈の宅、何ぞ須いん姑射の偏

(注31)

当該詩は、吉野と神仙思想が結びつく内容であるとともに、吉野山は「南岳」と記されている。なお、南岳は、南山と同意であると捉えられている。

当時、吉野がどのような地域と見られていたのかについて、上野誠は、『万葉集』巻一・五二番歌の藤原宮御井歌を挙げ、次のように述べている。

藤原宮は、國中たる奈良盆地の南部、大和三山の真ん中に営まれた宮である。この歌で注意しなくてはならないのは、三山と吉野の山々が、宮を守る四神に相当しているという点である。では、南の吉野の山々は、どう詠まれているかというと、「有名で、雲の彼方にある」と詠まれているのである。天子南面の中国の都城思想からすれば、南は展望よく開け、その彼方に山々がなくてはならない。(注32)

中国では都城造宮の際、天子は南面し、その先に南山が配置されるように造られる。古代中国の「天子は南面す」の思想に

基つき、藤原京も次の平城京も、南には吉野山が眺められるように造営されているのである(注33)。

また、和田萃は、吉野について次のように述べている。

吉野には、吉野川北岸に絶好の獵場である野(吉野の地名はこの地に由来する)、鮎のさ走る清烈な吉野川、吉野川の兩岸に迫る山々、遙か南に続く神秘的な山並など、恵まれた自然がある。こうした自然条件のもとに、古い時期には、吉野を異郷とする觀念を生んだようである。記紀の神武東征伝承には、吉野に住む井氷鹿が尾を持ち、国つ神の石押分もやはり尾を持っていて、巖を押し分けて出て来たという。また、応神朝に国巢が来貢し、記紀はその素朴な風俗を記している。これらの伝承は、吉野を異郷とし、そこに住む人々を異族とする意識の存在したことを示している。(中略)『万葉集』に吉野の自然を歌ったものが多いことも、その根底には吉野を浄らかな所、浄所とする觀念が存在していたことを示している。(注34)

都から遠く離れた場所に位置する吉野は、都の人々からすればまさに別世界、異郷であり、吉野の美しい山河が神聖なイメージと結びつき、神仙境と考えられていたのだらう。つまり、こうした地理的特徴もあり、吉野は日本の「南山」として捉えら

れていたといえる。

吉野が日本の「南山」として神聖視される背景には、壬申の乱での勝利により、吉野が天武朝の象徴となった影響が大きい。吉野の道教的性質を踏まえると、天武天皇の魂は吉野山に向かい、神仙としての復活を祈願されたのだろう。一六一番歌において、雲は「南山」に向かつてたなびいているのだが、その「南山」とは、天武天皇と非常に深いつながりのある吉野山が、この場合は妥当であると結論付けられるのである。

四 陰陽道思想と「南山」

前節では、天武天皇とゆかりのある吉野山が、日本の「南山」として捉えられていた可能性について論じた。したがって、当該歌にとって、吉野山を「南山」と表記している点には、重要な意味合いがあると考えられる。そこで、当該歌の解釈において、重要な意味をなすと考えられる、天武天皇と「南山」との関係について、陰陽道の思想からも検討してみたい。

天武天皇挽歌については、一六一番歌のみならず、前歌の一六〇番歌と併せて、特異性のある難解な歌として位置づけられているが、従来その表現に、陰陽道の思想が指摘されている。

『日本書紀』には、天武天皇が天文通甲に優れていたことが記されている。天文通甲とは、気象状況を観察して天の意思を伺うことで、物事の吉凶を占う、式占いの一種である。天武天皇の古いと言え、壬申の乱での「黒雲」が挙げられる。『日本書紀』における黒雲占いの場面は、天武天皇元年六月条に、以下のように記されている。

横河に及らむとするに、黒雲有り。広さ十余丈にして天に経れり。時に天皇、異しびまひ、則ち燭を挙げて親ら式を乗り、占ひて曰はく、「天下両分の祥なり。然して朕遂に天下を得むか」とのたまふ。^(注35)

ここでは、天武天皇が式盤を用いて占う様子が描かれており、まさしく遁甲式といえよう。

さらに、六七五年には、占星台が建設された記述が残っている。占星台建設の同年には「陰陽寮」の記述もあることから、やはり天武天皇は、政治の核として、陰陽道を大変重視していたことが理解できるのである。

当該歌における「南山」の「南」も、陰陽五行説では「火」や「赤」と同列の「火徳」に分類されている。天武天皇は、赤色を好んでいたとされ、『古事記』の序文には「絳き旗兵を耀かし、凶き徒瓦のごとく解けぬ」^(注36)と、壬申の乱で天武天皇が赤旗を

用いていたことが記録されている。また、六八六年に年号が「朱鳥」に改元されたのだが、これは、天武天皇の病氣平癒の祈願をこめたものと推測されている^{〔注37〕}。さらに、一二三五年に天武・持統合葬陵の盗掘を記した検分録である「阿不幾乃山稜記」には、天武天皇の棺が朱色に塗られていることが記されている^{〔注38〕}。天武天皇が、五行思想の五徳の中でも、特に火徳を意識していたことが想定できるのである。

この火徳については、当該歌における下句「星離去 月矣離而」の「離」の文字表記についても同様に言えるのではないだろうか。八卦の一つである離卦は、『易経』「説卦伝」には「離とは、明なり。萬物皆相見る。南方の卦なり。聖人、南面して天下に聴き、明に嚮いて治む。蓋し諸を此に取るなり」^{〔注39〕}とある。さらに、「離を火と為し、日と為し」ともあり、離は火（本象）であり、また、外側に陽爻があること、あるいは太陽が火の精であることからすれば、日（太陽）であるとし^{〔注40〕}、外は明るく内は暗い太陽の様子と離卦とを重ねている。また、六十四卦における離卦を二つ重ねた「離為火」は、より大きな火、すなわち太陽の象徴であるとされているのである。

ここで特筆すべきことは、天武天皇は「太陽の御子」とされていたことである。太陽神である天照日女神の直系子孫であり、

その子孫が人間の姿となって地上界を統治するという「日の御子」思想は、『万葉集』においても確認できる。天武天皇は『万葉集』中において「高照らす日の御子」と表現されている（巻二・一六二番歌、巻二・一六七番歌）。橋本達雄は一六七番歌について、歌中の「天照らす」が「高照らす」と対比的に強く意識されていたとし、次のように述べている。

この神話の筋は、天を統治するのは天照日女命であり、瑞穂の国を統治するのは天孫である高照らす日の皇子＝天武天皇であるとする意識をはっきりと表明しているのである。従って「高照らす日の皇子」は天皇以外であってはならないということになる。^{〔注41〕}

つまり、天武天皇は、「太陽の御子」として、神聖視されているのである。

当該歌の「離」に「火・太陽の象徴」という火徳の意味があるとすれば、この挽歌をもって太陽の復活を願うとして、「離」の文字は、意図的に歌中に組み込まれたと考えられるのではないだろうか。天武天皇が崩御することは、つまり、太陽の消失と同意であると考えられる。そのように考えると、当該歌において「離」が二度も登場する説明がつく。離卦が二つ並ぶ「離為火」は、大火の如き太陽を連想させるからである。

以上、本節では、当該歌における「南山」や「離」の文字表記に焦点を絞り、陰陽道の思想から検討してきたが、これらの文字表記も、当該歌の和歌解釈において重要な意味を持つていたと考えられるのである。つまり、「向南山」について、吉野山をあえて「南山」と表記した点には、天武天皇を「太陽の御子」として神聖視し、陰陽における火徳としての意味性を優先したことも、背景としてあるのではないだろうか^(注42)。またそれは、当該歌に二度も使用される「離」についても、同様に言えるのではないだろうか。

五 おわりに

本稿では「向南山」の訓み、ならびに、「南山」が吉野山と考えられることを考察した。「向南山」は、「北山」ではなく「南山」であること、また、「カミヤマ」や「キタヤマ」等の山の名前ではなく、「南山に向かつて」「向」＋「南山」と雲の動きを描写した表記であると指摘した。

そして、「南山」は天武天皇とも深い関わりのある吉野山であるとし、吉野という土地が内包する神仙観や道教的性質を挙げつつ、考察を試みた。古くから吉野山は「南山」と捉えられ

ており、それは古代中国の神仙思想に基づく認識であったと考えて相違ないであろう。当該歌における最古の写本である金沢本の表記「雲向南山」を尊重するならば、雲は「南山」、すなわち吉野山に向かつて行く様子が詠われていると解釈するべきではないだろうか。吉野山を「吉野」ではなく、「南山」と表記することで、天武天皇の魂が神仙として復活するために、仙人の住む山へと向かうといった情景が、読み手にも強く意識されよう。また、天武天皇を「太陽の御子」として神聖視し、陰陽における火徳としての意味性を優先したことも背景として考えられる。それは、当該歌に二度も使用される「離」についても、同様なのではないだろうか。このように、「南山」は、字面が持つ意味合いを重要視した表記であると捉えられるのである。

なお、「向南山」の訓みについて、現時点では判然としていないが、「みよしのへ」、あるいは「みよしのに」の可能性もあることを提示したい。「南山」を吉野山とするならば、集中における吉野を詠じた歌には、「み吉野」と訓むものが多い。そして、格助詞「へ」または「に」を続けることで、雲が吉野山に向かう様子や、その後の雲の動作を予兆させる詠いぶりになる。したがって、「向南山」は、「みよしのへ」、あるいは「みよしのに」とも訓み得ることを提起したい^(注43)。

注1 本稿における『万葉集』の引用は、小島憲之・木下正俊・

東野治之校注訳『新編日本古典文学全集 万葉集①』（小学館・一九九四年）に拠る。

2 例えば、新編日本古典文学全集、新日本古典文学大系、日本古典集成、万葉集全註釋、万葉集注釋、万葉集全注等、ほとんどの注釈書が本訓みを採用している。

3 平館英子『青雲』考―空間を認識するという視点から―『萬葉』第二九号、萬葉学会・二〇二〇年三月）

4 西宮一民「飛鳥の神なび」（『上代の和歌と言語』和泉書院・一九九一年）

5 金子元臣『萬葉集評釋』第一冊（明治書院・一九三五年）

6 中西進『万葉集』（一）（講談社・一九七八年）

7 森重敏『萬葉集栞抄』（和泉書院・一九九二年）

8 青木周平「持統天皇の天武天皇挽歌」（『セミナー万葉の歌人と作品 第一巻 初期万葉の歌人たち』和泉書院・一九九九年）

9 小島憲之「萬葉集と中國文學との交流」（『上代文學と中國文學 中―出典論を中心とする比較文學的考察―』塙書房・一九六四年）

10 小島憲之は、注9前掲書において、「上代国有の考へ方

と見るよりは、むしろこの歌の漢籍的な文字表現とともに、天文讖緯的な中國思想を暗示するものとみるべきではなからうか」と述べている。

11 『全唐詩』（巻八〇五「李冶」小伝）

<https://www.gushini.org/list/0-223022>（閲覧日 二〇二三年七月二日）。なお、本稿引用箇所における漢籍の返り点は、論者に拠る。

12 寒泉「王翰『蛾眉怨』」

<http://skqs.lib.nctu.edu.tw/dragon/>（閲覧日 二〇二三年七月一日）

13 翰墨亭「次石迪功韵其一」

<https://www.hanmot.com/GuShi/Details/b309f472-94e9-4bcc-aed9-7efc5d45829f>（閲覧日 二〇二三年七月二日）

14 注13に同じ

15 注9に同じ

16 金沢本は、当該歌において、重要な意義を持つものと考えられる。拙稿では、金沢本における当該歌の第二句「陳雲」について考察した。「陳雲」は、金沢本において「凍雲」と表記されている可能性があり、誤写の可能性は否定できないが、「凍雲」の場合でも十分に「読み」が可能である

ことを提起した（森ほか）『万葉集』巻二・二六一番歌「陳雲」についての考察―金沢本万葉集の検討―』『清心語文』第二四号、ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会・二〇二二年十一月）。

- 17 日本古典文学会『御物金澤本万葉集』（日本古典文学刊行会・一九七三年）。また、万葉集校本データベース作成委員会編「万葉集校本データベース」参照。
https://www.manyou.gr.jp/SMAN_1/

18 注9に同じ

19 注9に同じ

- 20 古詩大全「王立道『送郑翁还广其四』」（『具茨集』巻五）
<https://www.gushimi.org/gushi/1607561053420555.html>
 （閲覧日二〇二三年七月二日）

21 『初学記』巻五

<https://archive.org/details/06065075.cn/page/n50/mode/2up>（閲覧日二〇二三年七月一日）

- 22 川合康三「終南山の變谷―盛唐から中唐へ―」（『中國文學報』第五〇冊、京都大学文学部中国語学中国文学研究室・一九九五年四月）

23 寒泉「列傳漢書卷九十六上傳第六十六」

<http://skqs.lib.artnuedu.tw/dragon/>（閲覧日二〇二三年七月八日）

- 24 平山城児「吉野」（『上代文学研究事典』おうふう・一九九六年）

25 注24に同じ

- 26 和田萃「日本古代の儀礼と祭祀・信仰下」（塙書房・一九九五年）

- 27 小南一郎『道教信仰と死者の救済』（東洋哲学研究所・一九九八年）

28 烏谷知子「持統天皇の天武天皇挽歌―第一六〇・一六一番歌の背景―」（『学苑』第八〇七号、昭和女子大学近代文化研究所・二〇〇八年一月）

- 29 中村啓信訳注『新版古事記』（角川ソフィア文庫・二〇〇九年）

- 30 大形徹「不老不死仙人の誕生と神仙術」（講談社・一九九二年）

- 31 辰巳正明『懷風藻全注釈』（笠間書院・二〇二二年）

- 32 上野誠「南山、吉野の文学」（『万葉集』と東アジア）竹林舎・二〇一七年）

33 注31に同じ

34 注26に同じ

35 小島憲之・蔵中進・直木孝次郎・西宮一民・毛利正守

校注訳『新編日本古典文学全集 日本書紀③』（小学館・

一九九八年）

36 注29に同じ

37 注35に同じ

38 田中教忠「阿不幾乃山陵記考證」（『考古界』第五篇第

一二号、日本考古学会・一九〇六年九月）

39 今井宇三郎・堀池信夫・間嶋潤一『新釈漢文大系易経下』

（明治書院・二〇〇八年）

40 注39に同じ

41 橋本達雄「タカヒカル・タカテラス考」（『萬葉』第

一四二号・萬葉学会・一九九二年四月）

42 同じく天武天皇挽歌である一六〇番歌は、以下のとおり

である。

燃火物 取而囊而 福路庭 入燈不言八面 智男雲

この歌意は定かではないが、燃える火が歌に詠み込まれ

ている点は注目される。一六〇番歌も、やはり陰陽道の思

想に拠るものが大きいと捉えるべきであろう。

43 森重敏は、「向南山」を「人が南に向いたときに眼前に

対する山、すなはち、ほかならぬ南にある山」として吉野山と解釈しているが（注7前掲書）、「向」を「雲の動作の方向を示す介詞」としては捉えていない。本稿では、「向南山」を「南山に向かつて」の意であるとし、動作の向かう対象を示す格助詞「へ」「に」をあわせた訓みを提示する。

付記 本稿は、ノートルダム清心女子大学に提出した

二〇二二年度卒業論文の一部を加筆・修正したものである。

（もり ほのか／二〇二二年度卒業生）

キーワード＝天武天皇挽歌・南山・吉野山